

## 新潟県立看護大学における卒業生支援のための卒後動向の把握および支援ニーズ調査

### ～卒後 1～3 年目の卒業生に焦点をあてて～

新潟県立看護大学看護研究交流センター 特別研究部門卒業生支援グループ  
高島葉子, 永吉雅人, 原等子, エルダトン・サイモン,  
長谷川ヒデ子, 加城貴美子 (平成 27 年度まで)

#### I 調査の概要版をホームページに掲載する趣旨

新潟県立看護大学における卒後動向の把握および支援ニーズを明らかにし、卒業生支援のための基礎資料とすることを目的として調査を実施した。

なお、本報告は概要版であり、詳細については平成 28 年度看護研究交流センター活動報告書に掲載予定である。

#### II 調査方法

本調査は新潟県立看護大学看護研究交流センター事業の一環として、2014 年 3 月～2016 年 3 月に卒業した大学に連絡先の開示を同意した卒業生 82 名を対象に、2016 年 9 月に郵送法により卒後動向および卒後支援ニーズに関する質問紙調査を実施した。

対象者には、卒業時に連絡先を大学に開示している者への調査であること、調査協力の任意性、回答の自由意思の尊重、無記名であり個人特定されないこと、調査票は統計処理を行い、結果は本学ホームページ等に掲載予定であること、調査票の返送をもって同意とすることを依頼文に付記した。

#### III 結果

##### 1. 回収率

調査用紙は 82 名に送付、23 名から回答があった (回収率 28.0%) (表 1)。

表 1 回収率

	2014 年卒業生	2015 年卒業生	2016 年卒業生	合計
送付	33 名	25 名	24 名	82 名
回収 (回収率)	12 名 (36.4%)	7 名 (28.0%)	4 名 (16.7%)	23 名 (28.0%)

##### 2. 現在の免許取得状況(複数回答)

免許取得状況 (表 2) は、看護師・保健師の免許保有者 91.3%、看護師・保健師・助産師の免許保有者 8.7%だった。

表 2 現在の免許取得状況(名) n=23

①看護師	23	100.0%
②保健師	21	91.3%
③助産師	2	8.7%
④養護教諭	1	4.3%
⑤修士号	0	0.0%

##### 3. 最初の就業先(主たるもの)

###### 1)最初の就業先

最初の就職先 (図 1) は、病院に看護師として就職した者が 74%、保健師として行政に就職した者が 17%であった。

###### 2)就業先の配置場所の状況

回答者の勤務配置場所は、保健師として行政に勤めている者は、市町村役場内の部署および地域包括支援センターであった。

看護師として勤務している者は全員が病院の病棟勤務であり、単科の病棟勤務は精神科、小児科、産婦人科、新生児科の他、集中治療室、循環器・脳卒中センターという高度救急医療を担う病棟、消化器内科、整形外科、身体合併症内科などであった。また、混合病棟での勤務者が多く、内科外科の混合病棟、内科と皮膚科耳鼻科との混合病棟などの勤務者もいた。

また、回答者のうち就職先を変えた者はいなかった。

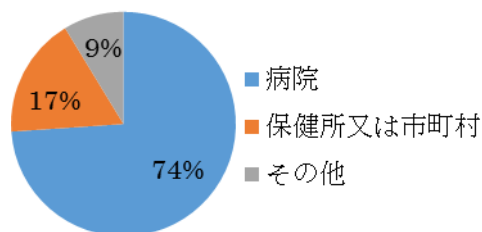


図1 最初の就業先 n=23

#### 4. 就業1年以内に業務遂行上感じた困難の経験の有無

##### 1) 困難の経験の有無

回答者のうち、卒後1年未満に業務遂行上の困難を経験したことがある者は20名(90.9%)であった(表3)。

表3 困難の経験の有無(名) n=22

①経験あり	20	90.9%
②経験なし	2	9.1%

##### 2) 困難さの内容(複数回答)

経験した困難の内容(表4)は、看護技術不足が70.0%、自分の勉強不足60.0%、実習での経験不足35.0%と、多くの回答者が困難は自分に起因したものであると自覚していた。また、医療機器装着未経験40.0%、実習で未経験科へ配属が20.0%、大学での基礎科目の履修不足5.0%と、大学での学びとの関連で経験や知識が不足していると考えていた。さらに、先輩看護師や職場での人間関係30.0%、患者様とのコミュニケーションの未熟さ15.0%と、患者様を含めた職場での人間関係が困難であると考えていた。

表4 困難さの内容(名) n=20

看護技術不足	14	70.0%
実習での経験不足	7	35.0%
実習で未経験科への配属	4	20.0%
医療機器装着未経験	8	40.0%
大学での基礎科目の履修不足	1	5.0%
自分の勉強不足	12	60.0%
患者様とのコミュニケーションの未熟さ	3	15.0%
先輩看護師や職場での人間関係	6	30.0%
その他	2	10.0%

表5 困難さの克服の仕方(名) n=20

勉強した	13	65.0%
上司・同僚などに相談した	7	35.0%
同期の同僚に相談した	7	35.0%
親に相談した	2	10.0%
友人に相談した	2	10.0%
大学の先生に相談した	0	0.0%
研修や学会等に参加した	1	5.0%
自分なりの困難対処法・ストレス発散を見出した	4	20.0%
ひたすら耐えた	4	20.0%
退職・転職した	0	0.0%
まだ克服していない	2	10.0%
その他	1	5.0%

##### 3) 困難さの克服の仕方(複数回答)

困難さの克服の仕方としては(表5)、「勉強した」が65.0%、「研修や学会等に参加した」が

5.0%と自己研鑽による克服がなされていた。また、「上司・同僚などに相談した」、「同期の同僚に相談した」が各35.0%、「友人に相談した」「親に相談した」が各10.0%など、誰かに相談することができていた。「大学の先生に相談した」は0%であった。さらに、「自分なりのストレス解消法を見出した」が20.0%であった。これらは、卒業生本人の個人的努力で克服できたものだが、「ひたすら耐えた」が20.0%、さらに「まだ克服していない」が10.0%おり、卒業生自身の努力だけでは克服できていない状況があった。

なお、卒業後に本学において開講された研修会や講座などへの参加経験者は3名(13.0%)であった。

#### 6. 求められている役割・立場

現在の職場における役割や立場(表6)は、スタッフ以外にプリセプター、実習指導など後輩指導を担っている者、委員会、研究チームの一員として職場の質向上に関与する立場にいる者もいた。

表6 求められている役割・立場(名) n=22

一般スタッフ	20	90.9%
リーダー	0	0.0%
プリセプター	3	13.6%
委員会	2	9.0%
実習指導	1	4.5%
研究チーム	1	4.5%
その他	1	4.5%

#### 7. 検討しているキャリア

検討中のキャリアアップ(表7)は、認定看護師や専門看護師、修士などを志望している者がいた。また、本学大学院進学検討中の者は2名(8.7%)だった。

表7 検討中のキャリア(名) n=23

認定看護師	2	8.7%
専門看護師	1	4.3%
修士	1	4.3%
博士	0	0.0%
その他	7	30.4%
無回答	12	52.2%

## 8. もっと学んでおきたかった科目(複数回答)

大学でもっと学んでおきたかった科目(図2)は、形態機能学が52.2%と最も多く、次いで臨床病態学と臨床薬理学が39.1%、看護学26.1%であった。

## 9. 卒後支援として期待すること(3つまで)

大学に期待している卒後支援(表8)は、看護に関するトピックスに対応した研修47.8%、研究支援の講座等の開設21.7%であった。次いで多かった項目は、転職・再就職情報39.1%、卒業生のネットワーク26.1%、メンタルサポート13.0%であった。

## 10. 卒業生支援や大学に希望すること

### (自由記述)

調査票の自由記述の卒業生支援や大学への希望は、学習支援に関すること、相談体制およびネットワークに関すること、キャリアに関する情報提供に関すること、本学への思い等が記載されていた。

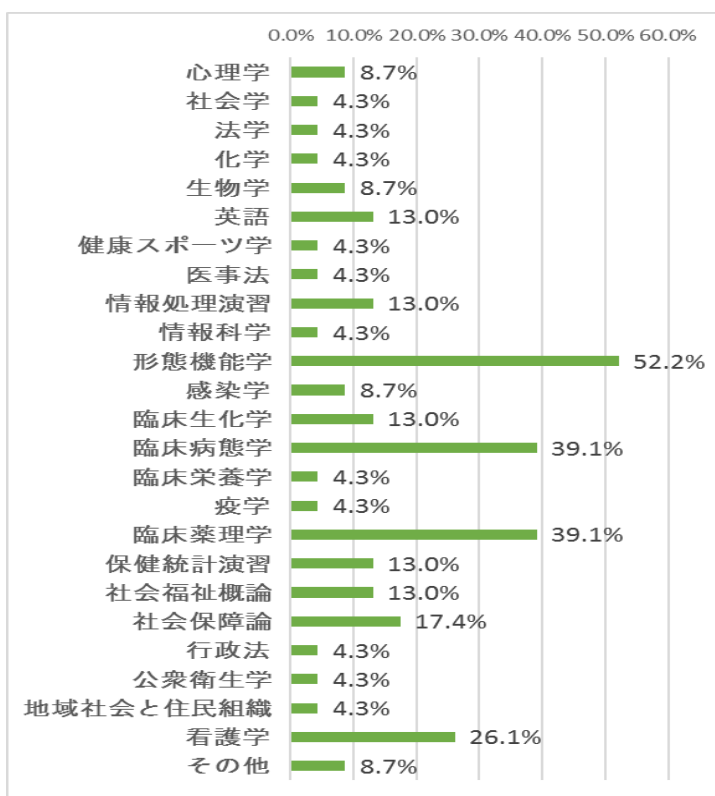


図2 もっと学んでおきたかった科目

## IV 考察および結論

### 1. 卒業生の実情と大学からの支援ニーズについて

卒後1年未満になんらかの業務遂行上の困難を経験した者が9割おり、その困難の要因が、看護師としての自らの技術不足や勉強不足と認識していることは、日比野ら(2009)の結果と同様であった。この困難への克服の仕方としては、何らかの対処法をとれた者がいる一方で、ひたすら耐え、まだ克服していないと回答した卒業生がいたことは、深刻な状況にあるかもしれないと心配されるところである。大学の先生に相談したという回答は0であったが、卒業生支援の必要がないということではない。実際、時折相談に訪れる卒業生に対して教職員は対応しており、大学として卒業生の相談を受け入れる土壌はあると考えられる。

卒後の配属場所は実に多様で、専門性が高い病棟や混合病棟への配属者が多かった。この実情は、卒後きわめて早期に、多様な専門領域の深い学習が要求されることを示している。このような状況で学習に対する困難を感じるのには当然であり、在学中にできる学習、卒業後の学習支援についても検討が求められる。また、自由記述から、大学や教員と繋がりを希望していることも明確になった。大学に相談窓口は設置してあるが、活用がなされていない。活用のしやすさ、周知の工夫が必要である。大学は直接支援だけでなく、臨床が新人をより良い環境で育成していくための側方支援も考えていく必要がある。

### 2. 卒後支援として大学に求められていること

卒後支援として「看護に関するトピックスに対応した研修」、「研究支援の講座等の開設」などの希望があがった。これらはすでに看護研究交流センターで取り組まれているものの、参加したことのある卒業生は13.0%にとどまっていた。今後は、研修不参加の理由を把握すること、研修をさらに周知すること、新人等の対象の研修を用意し参加しやすくするなどの工夫が求められる。また、転職・再就職情報、卒業生のネットワーク、メンタルサポートへのニーズもあり、今後検討し対策が必要である。

### 引用文献

日比野直子, 野呂千鶴子, 山路由実子(2009): 看護大学における卒業生サポートネットワークの構築をめざした卒業生動向の把握および支援ニーズに関する研究, 保健師ジャーナル, 65(08), 676-682.

表8 卒後支援として期待すること(名)	n=23	
看護トピックスに対応した研修	11	47.8%
事例のまとめの支援窓口	2	8.7%
研究支援の講座の開設	5	21.7%
個人研究の支援	1	4.3%
メンタルサポート	3	13.0%
転職・再就職情報	9	39.1%
進学相談	2	8.7%
卒業生ネットワーク	6	26.1%
無回答	3	13.0%